編集後記

「ガリ版刷り」の小学生がもう七〇歳です。今回は校正担当の翻訳家・村野氏、吉澤編集長のお二人で、あっという間に「水源地」三号が作成されました。もう小生は役立たずの傍観者になり果てました。■本（紙媒体）にすると書庫に眠ってしまうのが、ディジタル版ならいつでも画面に呼び出して読むことができます。これも考えてみれば驚きです。とにかく仕組みがまったくわかりません。■スティーブ・ジョブズの言葉で〆ますか。「もし、今日が人生最後の日だとしたら、私は今日やろうとしていることをしたいと思うだろうか」。（粕谷）

☆　☆　☆　☆　☆

本誌寄稿者の三氏について。■辰巳雅子氏はベラルーシのミンスク市内の図書館に勤務し、ベラルーシ人への日本語教育事業に従事し、新美南吉、壺井栄の作品のロシア語訳の単行本を刊行した（本誌所載の『ベラルーシにおける日本文化情報センターの取り組み』を参照）。ロシア語版『二十四の瞳』は昨年出版されたが、少部数発行のため、残念ながら日本では国会図書館と小豆島の壺井栄文学館でしか閲覧できない。よって辰巳氏は今、ベラルーシの版元と出版の交渉中だ。成功を願ってやまない。■昨年刊行のこの貴重な著作の印刷・製本を手がけたのが仙台在住の赤間悟氏である。ブログ「こがら通信」で赤間氏は健筆を揮っているが、今回の『私の幸福』には氏の人生が詰まっている、と感じた。本誌閲覧者の皆様に是非この文章の一読をお薦めしたい。■期せずしてと言うべきか、渡辺雅司先生の訳稿『哲学者の歌う心』（キセリョフ著）もまた一種の「幸福論」である。赤間氏の論と比較してみると、どうなるだろうか。■なお、渡辺先生によるロシア語オンライン講座に関心のある方は、遠慮なく、先生に直接、問い合わせて下さい。←

masajiwatanabe1945@gmail.com　（村野）

☆　☆　☆　☆　☆

紙媒体の雑誌もよいけれど、三～四年間隔の不定期刊なら、この先我々には二～三号しか発行できないことになる。我々に残された時間はそう長くはない。それでもよいのかと発行人を脅し、やっと完全ディジタル版で第三号を出すことになった。■ディジタル版になったことで原稿の締切に融通が利くようになり、これには書き手としての私自身も助かった。編集時に画像を配置する場合でも、左右のページを気にする必要がなくなったのも利点と言える。また、印刷屋を介さないから、発表後の修正や原稿の追加も随時可能となった。■紙媒体で出そうとすると、ＷＯＲＤで百ページ近い文書を一本のファイルで扱うことになり、ＰＣのメモリーがオーバー・フローして、編集中のファイルが消える恐怖感があった。今回はその心配がなくなり、気楽に編集作業を行うことができた。■仕事をやめてサンデー毎日の私は久々に充実感を味わった。（吉澤）

水源地　第三号

発　行　二〇二二年二月一日

編　集　水源地編集委員会

発行者　粕　谷　隆　夫

〒三〇〇―二七四一

茨城県常総市国生一三八〇番地

電話　〇二九七―四二―〇六二五